

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 9 月 7 日現在

機関番号：56101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02211

研究課題名(和文) 懐徳堂学派に始まる実学思想の研究 理念の実学から真の実学へ

研究課題名(英文) The study of practical thought on Kaitokudo school "practical thought" to real "practical thought"-

研究代表者

藤居 岳人 (FUJII, TAKETO)

阿南工業高等専門学校・創造技術工学科・教授

研究者番号：80228949

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、懐徳堂学派の儒学思想を分析した。中井竹山・中井履軒兄弟が活動していた時期に懐徳堂学派は「実学」 現実の政治実践に資する学問 の概念を提出した。懐徳堂の実学概念は、幕末期に至って当時の儒学思想に大きな影響を与えた。懐徳堂の儒学思想は、抽象的な実学を真の実学に昇華した。このような「実学」としての儒学概念を提出したことが日本近世儒学思想史上における懐徳堂学派の思想的意義である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、懐徳堂学派の儒学思想を分析して、中井竹山・中井履軒兄弟が活動していた時期に懐徳堂学派が「実学」 現実の政治実践に資する学問 の概念を提出したことを明らかにしている。懐徳堂の実学概念は、幕末期に至って当時の儒学思想に大きな影響を与えた。すなわち、懐徳堂の儒学思想は、抽象的な実学を真の実学に昇華した。このような「実学」としての儒学概念を提出したことが日本近世儒学思想史上における懐徳堂学派の思想的意義である点を明らかにした。それによって、本来、儒学が現実にかかわる学問であることが明確になり、その儒学の本質を知ることで現代の我々もより深く現実にかかわるべき存在であることが認識された。

研究成果の概要(英文)：In this study, I analyzed the Confucianism thought of Kaitokudo school. When Nakai Chikuzan and Nakai Riken brothers managed Kaitokudo, Kaitokudo school presented the concept of "practical thought"- the useful study for realistic political practice -. The concept had a great influence on the Confucianism thoughts in the end of the Edo period. The Confucianism thought of Kaitokudo school sublimated abstract "practical thought" into real "practical thought". In Confucianism thought history of Japanese early modern times, it is the historical significance of Kaitokudo school confucians that they proposed the concept of "practical thought".

研究分野：中国哲学

キーワード：懐徳堂 中井竹山 中井履軒 実学 朱子学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

懐徳堂の儒者に関する研究は、日本近世儒学史・日本近世思想史等の分野にわたって研究されてきた。江戸時代後期、特に寛政改革以降の儒学は、昌平黌を中心に各藩藩校においても朱子学が中心に教授されるようになったと言われる。しかし、従来、中国において明末から清初にかけて進展・変容した朱子学の研究成果を十分に踏まえて、懐徳堂の儒学思想を日本近世思想史上に位置づけようとした研究は必ずしも多くない。従来の諸研究を尊重しつつ、中国学の研究成果を基底に、これまでの諸研究を総合する観点から研究を進める必要がある。それによって、日本近世における儒学思想受容の様相をより深く解明できると考える。本研究は、中国思想史と日本思想史との相互交流をいっそう有機的に図るための一つの契機となる。

研究代表者の藤居は、懐徳堂最盛期の儒者中井竹山・中井履軒兄弟を中心とした経学思想・経世思想を取り上げて、江戸期儒者としての懐徳堂学派の立場の分析 懐徳堂の経学思想の分析 懐徳堂の経世思想の分析、の三点の柱を中心に、日本近世思想史における懐徳堂学派の思想的意義を明らかにすべく検討を続けてきた。中井竹山・履軒兄弟は、朱子学の立場を主として陽明学的要素も加えた独自の儒学を形成してきた。それが「実学」 現実の政治実践に資する学問 を志向する彼らの立場の基底にある。

ただ、中井竹山・履軒が活躍した時期はまだ機が熟しておらず、彼らがみずから儒者としてその実学思想を実践して活躍するまでには至っていなかった。いわば彼らの「実学」は理念としての「実学」だった。その後、懐徳堂学派の、理念の「実学」は、幕末期に至って彼らの影響を受けた、熊本藩士で福井藩において活躍した横井小楠や昌平黌儒官の佐藤一斎らに受け継がれ、真の「実学」として昇華されてゆく。このように懐徳堂の儒学思想をとらえることで、幕末に続く「実学」の系譜の展開に懐徳堂の儒学が重要な役割を果たしたことを明らかにできるはずである。

2. 研究の目的

本研究は、「実学」の概念を「現実の政治実践に資する学問」と規定したうえで、江戸時代の大坂に存した学問所・懐徳堂の儒者の儒学思想に表われる理念的な実学が、幕末期に至って地方藩藩儒や幕府の昌平黌儒官らの儒学思想に見える真の実学に昇華してゆく様相を分析する。

懐徳堂最盛期の儒者である中井竹山・中井履軒兄弟の時期における懐徳堂の儒学思想は、朱子学を主として陽明学的要素も加えた独自の性格を有するものだった。その基底にあった「実学」的性格は、幕末期の熊本藩の儒者横井小楠や昌平黌儒官佐藤一斎らにおいて実現した真の「実学」への萌芽を含んでいた。その実学思想が昇華し具体化する様相の分析を通して、日本近世儒学史における懐徳堂学派の思想的な位置づけを明確にすることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究は、下記の三点を並行的に進めることによって、研究目的の達成を図るものとする。

(1) 第一は、中井竹山と播州龍野藩の儒者との交流の様相を分析することと龍野藩の儒者の著述を分析することとである。元来、中井家は龍野藩藩医の家柄で、龍野藩とは深い関わりがある。竹山の『社倉私議』は龍野藩の経済対策の一環として提議されたものであり、実際に懐徳堂の儒学が龍野藩の実学として具体的政策に影響を与えた様相を解明する。

(2) 第二は、中井竹山と西国諸藩の儒者との交流の様相を分析することと西国諸藩の儒者の著述を分析することとである。大坂における学術界の拠点だった懐徳堂には全国から多くの儒者が立ち寄った。その中でも特に九州・中国の西国諸藩の儒者と中井竹山とは盛んに交流しており、そこから懐徳堂の実学思想が諸藩の政策へ反映される様相を明らかにする。

(3) 第三は、中井竹山に一時師事した佐藤一斎の著述の分析とその実学思想の解明とである。佐藤一斎は在坂時に中井竹山に師事しており、大いに竹山の思想の影響を受けたとされる。そこから懐徳堂の実学思想が幕府の諸政策へ反映される様相を明らかにする。

4. 研究成果

平成 29 年度から令和元年度にわたる期間において得られた本研究の研究成果は以下の通りである。

本研究は、「実学」の概念を「現実の政治実践に資する学問」と規定したうえで、江戸時代の大坂に存した学問所・懐徳堂の儒者の儒学思想に表われる理念的な実学が、幕末期に至って地方藩藩儒や幕府の昌平黌儒官らの儒学思想に見える真の実学に昇華してゆく様相を分析した。

具体的には、懐徳堂における中井竹山の実学思想の分析と主に西国諸藩の儒者や昌平黌儒官佐藤一斎らの著述の分析を通して両者の思想的立場の親近性を明らかにした。それによって、寛政異学の禁で朱子学が官学として承認されて以降、徐々に実学たる本来の儒学に対する認識が高まる結節点に懐徳堂の儒学が位置することを明らかにし、江戸時代後期を代表する儒学の学

派の一つとして日本近世儒学思想史上に懷徳堂学派の儒学を位置づけ直すことができた。

(1) 中井竹山と播州龍野藩の儒者とが交流する様相を『竹山先生国字牘』を題材に検討したが、『竹山先生国字牘』中に見える龍野藩儒者への竹山の書簡を分析する過程で、江戸時代における儒者の朝廷観に関する問題点が浮かび上がり、その問題を検討した。その結果、本来的儒者「修己」を基底にしつつ「治人」に携わるという儒者に近づきつつあった竹山が、日本独自の朝幕関係に対する見解を踏まえた朝廷尊重の立場から、天から受命した朝廷が幕府に政権を委任したといういわゆる大政委任論の立場にあることが明らかになった。このように儒者であっても、中国と日本とでは社会状況が相違しており、その状況の相違を踏まえたうえで儒者のあり方を分析すべきだということが解明された。

(2) 中井竹山の『竹山先生国字牘』と播州龍野藩の儒者藤江貞蔵の『梅軒独語』とを題材に、両者が交流する様相を検討した。その結果、貞蔵が『梅軒独語』を執筆した時期は明確ではないが、貞蔵を含む龍野藩の儒者グループが藩政改革の意見を記した上書を藩に奉った時期である可能性が高いことが明らかになった。結局、その上書一件は不首尾に終わり、儒者グループにも藩の処分が下がったが、『梅軒独語』には貞蔵の忸怩たる思いが反映しており、大坂からその状況を注視していた竹山も同様の思いを抱いていたことが解明された。恐らくその時期に貞蔵に宛てたと思われる書簡が『国字牘』に見えるが、「修己」と「治人」とをバランス良く重視する竹山の立場から、失意の貞蔵を励まそうとする意図をうかがうことができ、この書簡の内容が、竹山の儒者としての立場が実際の藩政改革の動きに反映している一例だといえることを明らかにした。

(3) 中井履軒の經学思想について、『中庸逢原』にみえる「中和」概念について分析し、履軒が一般の人々にも学問を通して向上する可能性があることを認めており、みずからが政治に主体的に参画してゆく前提として、みずからの頭で考える姿勢を強調していたところに履軒の思想の思想史的意義があることを解明した。

(4) 本来の朱子学者として中井竹山の面目は、社会全体に対する責任感に言及するところであり、このような責任感をもとにした現実の政治実践に資する学問が彼のいう実学だった点を明らかにした。そして、その実学重視の立場が懷徳堂儒学の大きな特徴であることを解明した。そのうえで最盛期の懷徳堂儒学の朱子学的要素が現実の政治実践の根柢たりえた様相について考察し、懷徳堂儒学の特質を明らかにした。そして、懷徳堂儒者と寛政期から幕末期に至る時期の儒者との関係を分析して、懷徳堂儒学が幕末期に至るまでの近世儒学思想史上において果たした役割、すなわち懷徳堂儒学の思想史的意義を解明した。

以上、本科学研究費補助金を得た三年間の研究期間で得られた研究成果である。最終的に、三年間の研究成果として、大阪大学大学院文学研究科に「懷徳堂儒学の研究」と題する博士学位請求論文を提出し、審査を経て、博士(文学)の学位を取得することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 藤居岳人	4. 巻 88
2. 論文標題 龍野藩の儒者と中井竹山と	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 懐徳	6. 最初と最後の頁 p8-p21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤居岳人	4. 巻 9
2. 論文標題 江戸時代における儒者の朝廷観 中井竹山、新井白石らを例として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 懐徳堂研究	6. 最初と最後の頁 p11-p28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤居岳人
2. 発表標題 中井竹山と龍野藩の儒者と
3. 学会等名 第28回懐徳堂研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 竹田健二、藤居岳人他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 451
3. 書名 懐徳堂研究 第二集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----